

吉野町煉瓦倉庫・緑地整備検討委員会（第2回） 議事要旨

日時	2015年11月4日（水）13:00-15:20
場所	弘前市役所 特別会議室
出席者	委員：秋元昭男委員、北原啓司委員（委員長）、木下克也委員、澤田栞奈委員、白戸大吾委員、高橋しげみ委員、中瀬康志委員、南條史生委員、前田卓委員、三上雅通委員、三上隆博委員 弘前市： 浅利（都市環境部長）、盛（都市環境部理事）、西谷（吉野町緑地整備推進室長）、工藤、斎藤 富永謙建築設計事務所（T A）：富永 日本総研：前田、山崎、佐藤（記）

1. 議事概要

（1）報告

①報告事項

- ・ 「魅力プロデュース室」→「吉野町緑地整備推進室」へ名称変更。
- ・ 各委員の紹介及び自己紹介。
- ・ 配布資料に関する説明。
 - メモリアルドッグの修復を行い、現在、煉瓦倉庫内に格納している。12月1日より一般展示を予定しており、現在準備を進めている段階。
 - 学芸員を募集中である。必要とされる受験資格、実務経験及び採用試験の内容を説明。
- ・ 本日、委員長は都合により、1時間ほど遅れての出席となる。その間、別の委員が職務代理者として議事進行を務める旨説明。

②報告事項に関する質疑

- ・ （委員）メモリアルドッグの痛み方はどのような状態か。
 - （事務局）足元にヒール等で付けられた傷がある。以前、タレントがメモリアルドッグを使用して撮影され、話題となったことが要因の一つと考えられる。
- ・ （委員）12月1日から予定されているメモリアルドッグの展示については公表して良いのか。
 - （事務局）写真に関してはまだ公表できない。展示すること自体は公表可能。
- ・ （委員）メモリアルドッグが格納されている煉瓦倉庫に人は入れるのか。
 - （事務局）入れない。
- ・ （委員）メモリアルドッグは、本来、美術館のコンセプトや煉瓦倉庫のイメージと合致させて展示するのが良いのではないか。
 - （事務局）12月1日より実施するメモリアルドッグの展示は、あくまでも1～2年の仮の展示である。美術館の構想については、耐震調査の結果を踏まえ、引き続き

イメージを固めていきたい。

- ・ (委員) 冬場は雪が積もるため、煉瓦倉庫の内部が外から見えなくなるのではないか。
➤ (事務局) 除雪については、庁内各課で対応していく予定である。

(2) 会議

- ・ 議論に先立ち、日本総研より検討会資料の内容を説明。
- ・ (議長) 課題は多種多様に渡る。検討会資料を前提として各委員の意見や、今後の進め方に関する希望を出してもらいたい。
- ・ (委員) 美術館の位置付けに関して、青森市にある「国際芸術センター青森 (ACAC)」は平面上どのあたりに位置するか？
➤ (事務局) 左上の象限に位置付けられる。
- ・ (委員) ゾーニングに関して興味があるが、まだ具体的な意見としては整理できていない。ただ、外からの動線を考えた時、搬入口が病院側で機能するのか等、再検討が必要だと感じる。
- ・ (委員) まだ案の段階だという認識ではあるが、ゾーニングの絵に、イメージが縛られてしまうのではないかと感じている。今現在、煉瓦倉庫を保存する方向性はどのレベル感で考えているのか？
- ・ (議長) 第一回検討委員会では、まだ煉瓦倉庫自体を保持するという認識はなかったと記憶している。
➤ (事務局) ゾーニング案は、まず面積を把握したいという目的の中で提示したものである。費用については、現在実施している耐震調査の結果を踏まえ、耐震補修に掛かる改修費や維持管理費を試算していきたい。ただ、この煉瓦倉庫は以前からの町の記憶として存在していることを鑑み、できる限り保持したいと考えている。なお、耐震調査は今年度末に完了する見込みである。
- ・ (議長) 検討委員会も年度内をメドに進めていると認識している。委員会の意見が耐震調査に反映されるようにしてもらいたい。
- ・ (委員) 現在実施しているのは耐震「診断」なのか？それとも耐震「調査」なのか？
➤ (事務局) 耐震「調査」である。診断を実施する予定ではない。
- ・ (委員) 美術館の維持管理をする中で、空調費は莫大なものになる。煉瓦倉庫を残しておきたいという気持ちは理解できるが、ランニングコストを掴みながら、どのこまの範囲を残すのか決めていくべきである。また、コンセプトを見ていると、弘前の伝統工芸を残していくことや、職人が活躍する場を設けることも大切であると思われる。
- ・ (委員) 伝統工芸という意見に関して、日本全体として文化を「残す」ための機能は失われつつあると思う。本事業は、文化の創出を打ち出す場として捉えるべきではないか。慶應義塾大学の准教授である田中浩也氏が組織する「ファブラボジャパン」や、カフェの中にデジタルスペースを取り入れている、渋谷のファブカフェのような機能を取り

入れてみてはどうか。

- ・ 我々自身がクリエイティブであるべきである。前例にとらわれないでほしい。チャレンジ精神を持ってほしい。
- ・ 本事業におけるターゲットは誰かということを見誤ってはならない。行政は市民のために本事業を推進すると思うが、他県からも客を集めることができなければ大きなビジネスモデルとはならない。東京から、または台湾・韓国から常に人を集めることができるような機能を取り入れていくべきだと思う。台湾・韓国ではクールジャパン系を取り入れた企画もあり、参考にすべき事例である。
- ・ 最終的には明確なビジョンを記述して、企画の中にいる人も外にいる人も共有できるよう、究極の目的を示しておく必要がある。
- ・ 煉瓦倉庫の保存については、商業機能と文化機能の線引きを明確にしていく必要がある。この両者のせめぎ合いはどこかで起こると思うが、線引きを明確にすべき。
- ・ 十和田市現代美術館の開館にあたっては、常設展と企画展の線引きについて問われた。その際、企画展であれば将来的にお金はあまり出でこないだろうという認識があったからこそ、十和田市現代美術館は常設としている。多くの人に関心を持つ美術品は価格が高いケースが多い。十和田市現代美術館では、客の半数は常設展を目的に訪れている。その点は当初の狙い通りであった。キュレーターは良い企画をすることで人を呼ぼうとする意識があるが、実際は常設展で人を呼び込んでいるという現実がある。今後購入する常設展の美術品については誰かがどこかのタイミングで決定しなければならない。
- ・ (委員) 自分の経験から言うと、建物を保存するという目的があったとしても、見せたいところを見せることができなかったケースがある。例えば、フローリングを見せたいのにもかかわらず、フローリングの上にショーケースを置かなければならないこともあった。建物をそのまま活かすということが難しいこともある。横浜や函館の煉瓦倉庫を参考に、活用できる方法を踏み込んで考えていくことが必要。C棟についても、解体することを決め付けるのではなく、保存する方法を改めて検討することも視野に入れてみてはどうか。
- ・ アート・芸術については、施設のコンセプトが何か？と考えたときに、まだ「薄い」と感じている。伝統工芸品をアートとして全面に出すことも含め、当該美術館は現代アートにこだわるのか、総合的な芸術として考えるのか、固めていくべきではないか。
- ・ (委員) 煉瓦倉庫の空間の中に、伝統工芸品がずっと居座ることは避けた方が良い。工芸品は文化庁がお金を出して保存しているが、今後は、工芸品を作っている人にフォーカスを当てた方が良いのではないかと考えている。
- ・ この施設のアイコンは奈良美智さんだと考えている。それ以外の常設品は今後買っていくことになるが、現代美術の中に彫刻や絵画が置いてあることを、果たして誰もが面白いと感じるのだろうか？この施設には、対談的な、今までになかった機能が求められているのではないか。

- ・ AtoZ 展では、倉庫内に家が並んでいたことを思い出す。そのような方法が良いと感じる。そう考えると、現在のゾーニング案ではバックヤードに面積をとりすぎではと感じる。バックヤードは煉瓦倉庫の外に設置すれば良いのではないか。
- ・ (委員) 工芸については、コンセプトとしては背景の解説がなければ魅力を出すことが難しい。アートとして注ぎ込んでいくことが大切だと思う。弘前市に来た時、曲がった建物や、崩れ落ちそうな建物が多々あり、迷路のように感じた。朽ちていくものこそ面白いと感じている。これらをどのように残していくかということを第一に考えていくべきだと感じる。
- ・ メモリアルドッグは当施設のアイコンだと感じるが、元々展示されていた緑地は、他のアーティストにとっても魅力的な場所だと感じている。金沢芸術村にも広大な芝生があるが、芝生と連携した建物を建てることも良いと感じている。
- ・ (委員) 津軽では現地の伝統工芸の職人とコラボレートして作品にしていた。元々は手書きが主流だったことを再発見できることになった。ただ単に伝統工芸だから飾れば良いというわけではなく、サステイナブルを出していく必要があると感じている。地域がどのようにして持続しているかと考えていく中で、生活に溶け込んだ見せ方をしていくべきではないか。
- ・ (委員) デザインの重要性について、例えば、エルメスの生地は日本製だが、エルメスがそこにデザインをすることで非常に大きな付加価値を産んでいる。デザイン、アートを一つの工房として集約させることが大事。工芸を置くだけではだめだと感じている。
- ・ アーティストインレジデンスであれば、ただ単にあるだけでなく、もう一つ先のことを何か考えていかなければならない。
- ・ (委員) 「国際芸術センター青森 (ACAC)」はアーティストインレジデンスを集行的に行っている。レジデンスのあり方自体を地域の中でどのような位置付けにするか考えながら進めなければならない。煉瓦倉庫に入った時、自分がダンサーなら踊りたいと思うだろうと感じた。それほど他にはない空間だと感じている。煉瓦の建物はどこにでもあがるが、煉瓦倉庫の中の空間は他にはない。中の空間を活かしてほしいと感じている。
- ・ (委員) 北九州にいたことがあるが、山口の秋吉台のアーティストインレジデンスから逃げてきたというアーティストを見たことがあった。この事業の魅力は、弘前市の中に住んで、クリエイトすることにあると考えている。無理に倉庫の中に住む必要はなく、市内の空き家等を活かした事業としても良いのではないか。
- ・ 伝統工芸は、この事業を機にコラボレートして、育っていくような見せ方が必要だと思う。創発的なものが生まれるポテンシャルが弘前にはあると思う。
- ・ (委員) 以前 AtoZ 展を実施した時は駐車場が足りなかった。しかし、その際、町全体として成功させようという空気があり、AtoZ のチケットを見せれば駐車場代が安くなるような取組みがあった。本事業は町全体として取り組まなければならない。煉瓦倉庫については外部よりも内部を残していきたいと考えている。中をいかに残すか、知恵を

出し合って考えていきたい。

- ・ (委員) AtoZ の時はメモリアルドッグの影もアートとなっていた。外に常設展示をする施設は他にもある。外と連携したゾーニングも考えていってもらいたいと考えている。
- ・ (委員) 見せるよりも教育的な施設が良いという考え方が資料に記載されている。学校の行事では子どもが文化・芸術に触れる機会は、あるようであまりない。学校では弘前の住んでいる歴史を知ろうという取組みがある。6月から10月まで生徒と5回ほど話す機会があったが、縄文時代のことや弘前城の話が出てきた。子どもは興味を持っているのだという印象を持った。拠点を作る中で、いつでも子どもが体験できる場があった方が良いと感じている。
- ・ 運動会では「音楽ネットワーク弘前」がジャズコンサートをやってくれた。その時子どもたちは騒がずに聞いていた。子どもは芸術・文化に興味を持つ。触れ合えるような施設があった方が良い。
- ・ (委員) 外の空間を活かすことの重要性は共感している。吉野町緑地で実験を行った時、イスとテーブルを置いているだけで人が本を読みに来る景色を見た。煉瓦倉庫がそのような位置付けとなってもらいたい。
- ・ (委員) アートの中にもダンスや演劇がある。どのようにしてこの中にクリエイティブしていくのか、という話があるが、多目的は無目的になってしまう可能性がある。ハリウッド映画以外のミニ映画は安い。例えば、ロシアやフィンランドの映画を買えば、100～200万円で上映できる。そのような場を弘前に作れば、東京からも集まるのではないかと感じる。大きい施設である必要はない。100人も入る必要もない。こぢんまりとしていても、演劇・ダンスもできるような、弘前の身の丈に合った場所を作るべきだと感じている。
- ・ (委員) 弘前は様々なポテンシャルを持っており、色々な映画や工芸にテコ入れして、これからの活動に繋がるような形と繋がるようにしなければならない。今までやってきたことと連携することが必要。この施設が、今までの財産を繋ぐ一部として発信できるものとなれば良いと思う。
- ・ (委員) AtoZ 展の際は、今まで芸術に興味がなかったが、倉庫を見たいという目的で倉庫の内部を見ている人もいた。
- ・ (議長) AtoZ 展の時に、10分で見終わった人たちがいた。その人たちに話を聞いてみると、「煉瓦をさわりにきた」とのこと。昔、煉瓦でかくれんぼをしていた経験があったらしい。入場料を払ってでも煉瓦倉庫の中を触ることが目的だった。煉瓦の中の良い雰囲気を残すために、どこまでの整備を行うのか、また法的な要件は何なのか、詰めていかなければならない。
- ・ (委員) 他の委員も言われていたように、前例にとらわれないということ、線引きをどこでするのか、ということが問われていると思う。建物を保存する中で、線引きを明確

にしていかないといけないプロジェクトであると理解している。

- ・ (委員) 緑地も含めて検討する業務だが、この委員会資料には緑地をどうするかという論点が含まれていない。
 - (事務局) まずは緑地よりも、美術館のコンセプトを考えてもらいたいという意味合いである。
- ・ (委員) 煉瓦倉庫の外との関係性を考えたい。次回は、外との関係性が分かる話を資料として入れておいて欲しい。
- ・ (委員) ショップ等の機能を入れようとしているのか？
 - (事務局) 具体的にどのような機能を入れるのか、ということは民間事業者にヒアリングを実施中。また一方で、美術館機能と親和性を保つことができる機能であることを前提に整理している。
- ・ (委員) 学芸員を募集しているが、雇用された後の学芸員の立場は？
 - (室長) 事業を検討する中で、実務経験がある人が内部にいた方が良いという観点から、今回募集を実施している。
- ・ (委員) 「八戸ポータルミュージアム はっち」では、文化創造事業ディレクターとして吉川由美さんを雇っている。ただ、本事業においてそのような位置付けでアドバイザーとしての役割は奈良美智さんだと思う。学芸員はどのような位置付けなのかがよく分からない。
- ・ (委員) 美術館の扱い方のノウハウを持っているという意味で学芸員はいた方がいいと思う。しかし、将来の経営体系をどのように考えているのかということが気になる。夜間の営業について、公立美術館から来た学芸員であれば、残念ながら柔軟には対応できないと思う。
- ・ (委員) 学芸員という位置付けでなくても、施設のコンセプトを決める話の中で、将来のことを見据えて、見切り発車とならないようにするべき。次回の検討委員会ではそれを議論できればと思う。

(3) 閉会

- ・ (事務局) 次回検討委員会は 12 月 17 日 (木) 14 : 30 ~ の予定。